

彼女はサボテンだった

馬汁

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サボテンが擬人化します。

女の子の高校生ライフ、サボテンちゃんらしく支えてあげちゃいます。

植物だつて、青春するんです。

目

次

幕裏・裏話だつたりとか。

序章

自分はサボテンだ、

彼女はサボテンか？

君はサボテンだ。

家族の一員

サボテンは名無しだ。

サボテンは人間だ。

サボテンはサホだ。

39

30

24

17

10

4

1

幕裏・裏話だつたりとか。

裏話兼挿絵置き場です。です。

埋もれていたはずの、謂わば骨董品の様な作品に感想がついて驚いたので、拙い絵ではありますが容姿なんかのイメージ画像をここに載せさせて頂きます。

更新する気配もない作品を気に入られた方への、せめてもの詫びも兼ねてます。

名前：咲歩（サホ）

元サボテンの電波系少女。

{IMG83849}

旧デザイン。つていうわけでも無い。上記の絵はコスト削減の為コードを簡略化した。下記がオリジナルに近い。

{IMG83851}

以上です。ええ。

この絵を載せるためだけに、数年前に停止したこの小説の更新日を塗り替えたと言つても過言では無い。

でもそれじやああつけないので、この作品が書きたくなつたきつけをここで語らせて頂きます。

と言つても、可愛いキャラクターの可愛い様子を書きたいかな、という思いだけを抱いて、勢いで書き始めました。二章で終わるのも致し方なし。

はい、きっかけは以上です。呆気ないです。2階から落ちてしまつた豆腐みたいに呆気ないです。

凍結してしまつたこの作品、自分としては再発動する気力はあるのか無いのか微妙な所なんだけれども、今更再発動しろと言われても今書いてる双子テーマの作品を優先したい氣分でして。

萌えで且つ尊い、という事象を生産したいなら、彼方の方だけでお腹いっぱいなのです。プラス、多趣味な事もあって小説にも時間を割きづらい。

多趣味なお陰で、可愛いキャラクターの姿を自分で考えて、描いて、愛する（性的では無い）ことができるのですけれど。因みに上の絵なんかもそう。

さて、この作品で語る事と言えばこれくらいでしょう。これ以上語るとなれば、これからプロットの吐くしかないのですが、これもあり考えておらんわけで。

入学したりはせず、サボテンが近所を放浪して、サクラミの同級生と鉢合わせてサクラミちゃん胃が痛くなる！見たいなのを想像している程度です。

擬人化の経緯なんかも一応設定があるんですが、物語終盤で一氣にたたみかける様な情報なので、ここで語るのはメインディッシュ前にはデザートの様なもの。いや、そのメインディッシュが一生出てこないのでは仕方ナインですけども。

ただ言えることがあるとすれば、学園アニメでありがちな、最終話前後で文化祭成功！みたいな感じで、その時期を物語終盤としようかと思つていました。

以上で自分の裏話の様なボヤキは以上です。

不思議なことに物語よりも独り言の方が書きやすいのだが、これをなんとか小説書きに活かせないものか……などと考えて、そういえばソレが、例の双子小説の原点だったなと思い出す。

私の独り言適正能力が微妙に生かされているような無いような感じの妹作品も、よろしくお願ひします。

これ小説規約的に大丈夫なんか。

追記

なおこの文書は適当なタイミングで消失する

序章

自分はサボテンだ、

植物は、生き物である。

生き物であるということは、その生存競争に身を投じて いるということ。

太陽を求めて枝を伸ばし、外敵から身を護るために毒を持ち、あるいはその毒で競争相手を枯らす等……。神でさえ数えるのを諦めるような年月を経た進化の中で、「知恵」を練つてきた。

おかしな話だ。

脳がなければ、神経も通つていらない。あるのは、それぞれの役割を遂行する細胞達のみ。

それらが、生きる為の術を講じているとでも言うのだろうか？
あるいは、無数の進化の末の絶滅、生存を繰り返し、「無限の猿定理」を乗り越えた結果なのか？

無作為に選ばれた変化が、偶然、知恵を練つた結果であるように見えただけなのではないだろうか？

(……分かんない)

無数の毛のようなモノを纏つたソレは、止めどなく続いていた思考を止める。

思考という、脳のある生き物にある特権を得たソレだったが、それでも哲学に関しては何時まで経つても結論というものを下すことができない。

(生存競争とか、別にどうでもいい。……それに、寒い)
話が変わるが。

ソレが思考し、そして寒さを感じていると言うのは、人間社会における常識の上では、まったくもって“ありえない”。

何故なら、今までソレといつた代名詞を使つていた対象は、植物であるからだ。

もつと言えば、その植物はサボテンである。

(風も、強い。空は暗い。……雨、いや、雪が降る)

植物が思考するとは、なんという非常識だろうか。その思考で哲学を練り、更には天気の予測までするのだ。

そして、なんと數十分後には雪が降り始めた。

雲が無ければ、西の地平線に太陽が沈みかけているのが見える頃であつた。

(……もつと寒くなつた)

思考どころではなく、天気の予想までこなしてしまうこの非常識なサボテンの上に、そして鉢と土の上に、しんしんと雪が積もる。

初めは土に触ると直ぐに溶けていた雪だが、時が経つにつれ、土自体が冷えて雪が溶けなくなり、本格的にサボテンは雪化粧を始める。

寒さに震える事も出来ないサボテンは、その寒さに不機嫌そうにしながらも、太陽が顔を見せるのをじつと待ち続ける。

残念ながら、太陽と再会するには約12時以上待たなければいけないのだが。

(……あ、人)

太陽の顔が完全に隠れてしまつてからそれなりの時間が経つて、道の向こうからやつて来たのは、1人の人間であつた。

それも、見知った顔……いや、むしろ見慣れすぎて馴染みきつた顔だつた。

(サクラミ)

そしてこのサボテンは、その人物の名を知っていた。

そもそもその筈。このサボテンの鉢があるのは、この少女が住む一軒家の敷地だからだ。

道路から石レンガの塀を挟んで反対側にある建物。日本の歴史を感じる程古くはないが、近代的とも言い切れない建造物。

そこに住む住民が、あのサボテンを飼つているのである。因みに普段はこの石の塀の上で飼われている。

「うわー、冬だなあ。家も結構積もつてるじゃん」

(家も、自分も、本格的に積もつてる)

「早速あんな所に雪だるま作られてるし……つてこれ、うちのサボテンじゃん！」

そう、積もつていてる。

雪が降り始めて結構な時間が経つたが、サボテンに積もつた雪は、化粧を超えて着ぐるみと言つても過言ではない程になつていた。途中から雪の勢いが強くなつたからだろうか。

少女が壙の上に手を伸ばすと、サボテンを鉢ごと持つた。

そのままサボテンが纏つていた雪が払われ、緑色の小さな体が露わになる。

心なしか元気がなさそうだと、この少女の目には映つた。
「……よし、決めた。家中に入れよう。流石について言うか、どう見てもこれはサボテンの身体に悪いし」

(……家中に入れる?)

その発言の一部が、サボテンの心の中で復唱される。

サボテンに必要な世話の手間は少なく、家中に持ち込まれる様な事は、大事でもない限り無かつた。

抱えられたサボテンが、少女が走り始めた事によつて揺れる。

あるはずのない三半規管が揺らされた気がしたサボテンは、若干の気持ち悪さを覚えた。

ガチャ、と扉が開いた後、建物の中身を眺める余裕はあつたが。
(きれいな家だ)

「ただいまー！ つと、サボテンは何処に置けば……」

揺れていた鉢が、ようやく落ち着く。

立ち止まって考え込む少女は、腕に抱えた植物の置き場所に迷う。

サボテンという植物を飼う為に付けた知識の内に、風通しの良い場所で飼うのが良いという物がある少女は、その候補に複数の場所が思い浮かぶ。

「取り敢えず窓際……風通しが良い方が良いなら、1階よりも2階だよね」

少女が適当に見当をつけて、目的地を定めてまた走り始める。

バタバタと階段を上がり、そこの廊下を数歩行つてまたガチャヤリと扉を開く。

(桜実……。こんな漢字だつたんだ)

揺れる視界に捉えたに、扉に掛かつた小さな札を読み上げるも、少女は容赦なく鉢を揺らす。

「……らへんに……よし！」

揺らされ、揺らされ。

そしてようやく落ち着いた場所は……。

(……高い)

2階の部屋の、窓際。あの壁にかかつっていた名札を見るに、この少女の、サクラミ桜実の部屋だろうと、サボテンは推察するまでもなく理解した。前まで居た堀の高さでは、すぐ側の道を行く人間ぐらいしか見下ろすものがなかつたが、ここなら、より多くのものを見下ろすことができた。

「よしつ、ここなら良いでしょ。暖房も効いてるし、むしろサボテンには良い環境かな？ グッジョブ、私！」

(……良い場所)

サボテンと少女。それぞれ賞賛の言葉を口に、或いは心の中に咲いた。

その頃だろうか。

きゆるる、と、何かが唸る様な、しかし動物がする様な物ではない音がした。

「うげ、お腹が鳴っちゃつた。今日は何食べよつかなー」

(……桜実、何を食べてゐんだろう)

サボテンは、少女を案じる様なことを呟く。

いや、案じていると言うよりかは、単純な興味なのかも知れない。

サボテンが少女をなんとなく見つめている内に、少女は空腹を満たそうと、部屋を出て行つた。

(行つた……)

1階に降つて、キッチンで何か調理しているのだろう。とサボテンは予想する。

塀の上で、あの家の生活音を日頃聞いていたから、あの少女は普段から自炊していると知っているのだ。

(……世界は広い)

扉から目を離し……と言つても目はないのだが、代わりに意識が窓の外側へと向けられる。

雪は相変わらず降つていて。強さは先ほどと変わらないだろうか。(部屋は……ちょっと狭い)

今度は部屋を見渡す。

いたつて普通の部屋。小物類に女の子らしさが見られるが、家具にはその様な“らしさ”は見当たら無い。

そもそも、このサボテンはそう言つた“らしさ”を理解しているのだろうか？

普通ならば、それは有り得ないだろう……。そう、普通ならば。

(……かわいい?)

完全に理解したとは言えなくとも、直感的に感じたとなれば、それだけで十分“人間らしい”だろう。

全体的な様子を見ていたサボテンは、机の上に乗つたとある物に意識を向けた。

(これ、見たことある。確か……)

机の上にある、とある物を見つけたサボテンが、記憶を探る。

10秒もすればその記憶は掘り出される。合点のいつたサボテンは、その正体を言い当てる。

(桜実が、今よりもずっとずつと小さかつた頃から付けてた、髪飾り)

——人間らしい“サボテン。

それほど奇妙な物は、この世に2つと存在しないだろう。

いや、1つもある時点で、それはもう異常である。

だがそれは、きっと、ある意味では普通のことなのかも知れない。

(……懐かしい)

何故ならソレは、長い間この家族に寄り添っていたのだから。

ふと、昔の記憶を振り返っていたサボテンが居る部屋に、ほんのりと匂いが漂い始めた。

(……匂いがする。料理？ 何を焼いてるんだろう？)

——下の階にある、キッチンの方に興味を向けた“ソレ”は、
——惹かれるように、ゆっくりと、歩き出した。

べた、べた、べた。と。

彼女はサボテンか？

ぺた、ぺた、ぺた、ぺた。

その足音は、この家の住民である少女にとつて、ある筈のない音だつた。

とある事情により、この家には桜実の1人しかいない。勿論それは彼女も自覚している。ならば、自分が歩いている訳でもないのに聞こえてくるこの足音は、なんだ？

「……あれ？」

ぺた、ぺた、ぺた。

足音がより近くから聞こえてくる。

方向は階段の方。ジユージュート豚肉が焼ける音に紛れているが、桜実の耳は確かにその音を捉えた。

「……！」

ぺた、ぺた。

その時、侵入者の存在を確信した桜実は、即座に調理をやめて音の方を振り返る。

警戒心を抱く彼女だが、この状況でどう行動すれば良いかが頭に浮かぶ。

階段とキッチンの間は、ガラスの引き戸で隔てられている。

彼女は椅子を持ち出すと、引き戸のフレームの側面を抑えるように立て掛けた。

こうすれば開かない。

ぺた。

引き戸のガラスの向こう側に、人影が写る。磨りガラスを挟んでいるから、その人の正体はわからない。

知らない人であるのは確かだ。しかしやけに肌色が多い。

彼女は引き戸から離れ、携帯を手に取る。押す番号は『110』、警察に連絡を試みた。

【バシャン！】

「ひ！」

が、引き戸が揺れたせいで、桜実は驚いて携帯を手放してしまう。画面には『11』としか出ていない。

【バシャンバシャン！】

再び引き戸が揺れる。椅子で抑えられないと知つて、前後に動かしている様に見える。

椅子が倒れてしまつてはいけない。と桜実が危惧する。
「あ……！」

しかし、不幸なことに、引き戸を抑えていた椅子が外れてしまう。

【バシャンバシャンバシャン！】

引き戸が開かれる。そう思つて、すぐに離れた。

どうすれば良い。携帯はどこにある。警察を呼ばなきや。あの人を抑えないと。

思考が絡まる。彼女はこういつた事態に慣れていなかつた。

【バシャン……】

しかし、どういう訳か、抑えが外れた筈の引き戸は一向に開かない。それを見た彼女の頭に浮かんだのは、引き戸を開けない理由でも携帯の場所でも、相手をどう抑えるかの手段でもない。

この状況で出てくるにしては、やや緊張感に欠ける疑問が、その頭に浮かんできた。

「……なんで裸なの？」
「…………」

思わず出てきた呟きが届いたのか、引き戸を前や後ろへ押して引いてという動作が無くなつた。

「服を着てないから」

「服を……えつと、うん、そつか」

質問に答えが戻ってきた。この時、自覚はしないものの警戒心が薄れていた。

磨りガラス越しに見える相手の体格は、裸という事もあってその性別はすぐわかつた。

声も、体格も、女性であることは間違いない。と少女は判断する。すると、またガシヤンガシヤンと引き戸が揺らされる。

しかしそれも数回で止み、磨りガラスの向こうの人影が、首を傾げた。

「……どうやつて開ける？」

「え？ えつと……、右に引いて開ける」

「開いた」

どうしてか。全裸でない方の少女は、とつくに警戒心を完全になくしてしまっていた。

引き戸が開かれ現れたのは、ボサボサの縁の髪をした、丸顔の女子。

裸だから、その身体がやや貧相……よく言えば、スリムだという事はすぐに見て取れた。

侵入者が、自身より数センチ程小さい女の子だと知り、そしてその顔や言動に悪意が全く見られなかつた。

故に、全裸でない少女は安心こそしないものの、警戒の必要はないか、と判断した。

「……あれは、夕飯？」

そう言つて、侵入者の指がキツチンの方を指す。

なんの事だ、と思つて少女は振り返り、そして思い出す。

咄嗟のことだつたから、フライパンに火をかけたまま放置してしまつていたのだ。

「あつ」

幸か不幸か、炒められていた豚肉は焦げかかっていた。

・・・

少々黒焦げた部分が見える生姜焼きが出来上がつた頃、侵入者の女のはトレーニングコートを着て、椅子にちよこんと座つていた。

追い出される事もなく、むしろ玄関前のポールハンガーに掛かって
いたトレンチコートが貸し与えられただけ、幸運だろう。

「えっと、食べる？」

「……食べ物を？」

この食べ物以外に何があるのか。桜実は思う。

「……食べない」

不思議な女の子だ。今度はその感想を抱いた。

何故こんな子が家に居るのだとか、どこから来たんだとか。そもそも名前はなんだ。等の疑問は、とつくる前から出ている。

それに、その様な疑問はとつぐに問い合わせたのだが……。

「桜実が持つて行つたから」

「桜実の部屋から」

「サボテン」

私が一体何をしたというのだ。と、逆に頭を抱える結果となつてしまつた。

勿論、桜実にはこの様な女の子を部屋に連れ込んだ記憶はない。

名前を訊いた筈が、自身もよく知る植物の名が出てきた事は、気のせいだという事にした。

「取り敢えず……いただきます」

「……」

この女の子は何かするつもりなんてない様子だから、気が引ける思いを我慢し、まず空腹を満たす事にした。

せつから出来た料理を冷ましては、金曜日の晩御飯が不味くなる。まず一口食べる。白米も一緒に口へ運ぶ。

豚肉の旨味に加え、生姜を始めとするタレが、この肉肉しさを爽やかな味覚へと進化する。

「……」

ほんのりとした生姜の刺激と香りが、肉と米の相性をより素晴らしい物へと変える。

焦げ目がある所は食感が少しだけ硬い上に、ちよつとした苦味が舌の上に乗つかつてくる。

「……」

と、この様に。生姜焼きは、うまく調理すれば美味しく出来上がるものだし、レシピ通りに作るだけでも満足できる料理の一つだ。

だが、今の桜実には、そんな料理の味が感じられなかつた。

豚肉の味や、生姜のちょっとした刺激や香りなどは、味覚として認識される事なく噛み碎かれ、そして飲み込まれてしまう

「えつと……」

目の前からの目線が気になつて、気になつて。ついに耐えきれなくなつた彼女は、女の子を見つめ返した。

この女の子は、無言で彼女の食事をただ見つめていたのだ。気に入るのも仕方ない。

「……美味しい？」

「う、うん。美味しいよ」

（そもそも誰、この子？）

この問いを頭の中から口へ出かかつて、しかし言葉にならずに頭の中に返つてくるのを、何度も繰り返している。

誰だ、と問い合わせたところで、帰つてくる答えは決まって「サボテン」だ。

桜実は食事と一緒に言葉を呑み込んだ。

「……」

「……た、食べる？」

「サボテンはものを食べない」

遂には話さえ通じない。

サボテンと名乗った女の子は至つて真面目なのだが、桜実にとつては何かから何までが全ておかしい。100人に同意を求めて、100人が頷く事だろう。

所謂、電波系だろうか。

しかし交信を突然開始するような様子は見られないから、植物系と言つた方が近いかもしない。

そのような考察を続ける桜実だが、しばらくするとその思考が放棄される。

考えるだけ無駄。結論はそれであつた。

「（）馳走さま」

「……まだ、残つてる」

「あとは明日の朝食にするよ」

タツパーを手にとつて、生姜焼きの残りを移そうとする。

明日に引き継ぐのは作り始める前から決めており、そのつもりで多めに作つていた。

「……」

「う、うう……」

しかし、タツパーの蓋を開いて皿を傾けようとしたところで、強烈な視線に耐えきれず、呻き声を上げてしまう。

なんというか、居心地が悪いというか。

思わず振り向くが、そこで、サボテンを自称する女の子が桜実自身の方に目線が向けられていないことに気づく。

よく見ると、その目線の先はタツパーと生姜焼き。

なるほど、と、桜実はこの女の子が送る目線の意味合いを、少しばかり理解できたような気がした。

「……食べる？」

「……」

先程までは、サボテンだからと言つて拒否していたくせに、今回に限つては無言で見つめ返してくる。

その目が、まるでご飯をねだる犬の目に近いものを覚えた。

「じゃあ、ほら」

まだ片付けていなかつた箸で一枚の肉を掴み上げると、女の子の目の前の差し出した。

スプーンもまだ掴めない子供に、食べ物を食べさせるように。

「口開けて。あーん

「あーん？　……むきゅつ」

簡単に桜実の言葉に従つた女の子の口を目掛け、すっと肉を滑り込ませる。

「むぐ、む。もぐもぐ、もぐ？」

まるで食べ方さえ知らないような仕草だったが、少しづつ時間をかけて噛んで……、

「（）くん」

呑み込んだ。

「……どう？」

「……美味しい」

「そつか」

桜実は頷く。やっぱりこの女の子に害はないと、確信したのだ。
この子の親とか、どこから来たか、そもそもなんで裸だったのは気
になる。が、『とりあえず害はない』。今の所はそこだけ結論を下すこ
とにした。

「…………」

さて、この子をどうしようか。警察にでも連絡して親を探した方が
いいだろうか。

そう思つて腕を組んで考えてみる。

「…………」

「……まだ食べたい？」

こくり、と仕草だけで答えた。

なんだか、見た目よりも幼いみたいだ。

桜実は微笑んで、二口目の生姜焼きを箸で摘まみ上げた。

君はサボテンだ。

「さ、何時までもコートを着てるんじゃ可哀想だし……まともな服着せないとな」

結局明日の分の生姜焼きまで完食してしまった後、だばだばなコートを着た自称サボテンの女の子を、先ずは自室に連れて行く事にした。

「服？」

「そそ、お洋服。あ、でもこの子のサイズあるかなあ……。数年前の服なら……でも何処に置いたつけなあ」

捨てたり、売つたり、譲つたりした記憶はない。家族が処分するとしても、一声かけてくれる筈。

だから、部屋の何処かにはあるだろう。と見当をつける。自室に戻ると、先ずは記憶を漁ることにした。

桜実とて高校生、成長期が男子より早いとは言え、成長は続いている。

その過程でサイズが合わなくなつた服は、勿論今後使う事は無いから、少なくともすぐ手の届くような所には置かない。

そう、どこか奥の、多分あそこらへんの――

「……どこだっけ？」

しかし覚えていない。彼女の記憶力は並だが、数年前に適当に仕舞い込んだような物の場所なんて、一々覚えていられないだろう。

しかしやはり、手放してはいとは確信する。

周囲が散らかるのは意に介さず、中に入っている服やら小物やらをどかして行く。

「ひらひらが沢山……」

「お、あつたあつた。そう言えばダンボールに詰めてたわ」

多数の積まれた服の向こう側に、大きな箱が隠されるように置いてあつた。

ダンボールの匂いが気になるが、スプレーで間に合わせ程度の対処をすれば良いだろう。今度は消臭スプレーを求めて、他の所を探り始

めた。

「……」

「えーっと……おーこれこれ。つて空じゃん！」

忙しなくあちこちの棚を開けては閉じ、開けては閉じを繰り返している間。サボテン自称の女の子は、勝手にダンボールの中身を覗き込んでいた。

「……」

女の子が注視しているのは、白い服と紺色の上着。胸にあたる箇所にはバッヂが付けられている

この女の子には、この様な服に見覚えがあった。数年前まで、桜実がこれを着てほぼ毎日出掛けていた。

「詰め替えは、どー。あれ、どうしたの？」

「これ」

女の子が、好奇心だけで持ち上げた一着を桜実に見せる。

「あ、制服か。それ着てみたいの？」

「着ない、の？」

「え、私が？　いや着ないよ。サイズ合わないだろうし、中学校の服だし」

「中学校……でも、似てる」

（似てる……のかな？）

と、桜実は同感しなかつたが、少し考えると確かに似ているかと納得する。

今の時期は結構寒いが、今はこの部屋が十分に温められているのもあって、桜実はワイシャツ姿である。

そしてこの女の子が持っているのは、中学校の頃に着ていた制服一式だ。

ワイシャツに限定して言えば、一見すると全く一緒に見えるだろう。あつても、首回りにネクタイカリボンかという違いしかない。

サイズに関して見れば、あのダンボールの中に入っていた事が意味する通り、今桜実が着ているワイシャツよりも小さい。

「それ着る？」

「着る……？」

言葉を受けて、女の子は手に持つている服をじっと見つめ始める。確認の為にと投げかけた問いだが、実のところ桜実としては、もつと可愛い服を着てもらいたいと思っている。

やっぱり他のを勧めようかなあ、と彼女が迷っていると、ふと女子が動き出す。

手に持つていてる服をわしゃわしゃと、探るように弄り始める。

広げたり、伸ばしたり、被つてみたり、穴に腕を通してみたり。

「……？」

「え」

何をどうしたら、腕の袖に頭を突つ込むという判断が出来るのだろう。

そもそも、ワイシャツはコートの上から着るものじゃない。

「もしかして……服の着方も知らないの？」

「知らない」

まさかとは思つて訊いてみれば、なんと知らないという答えが返ってくる。

見た目は中学生か、サバを読んで高校生かぐらいだと言うのに、それぐらいの年齢で服の着方さえ知らないとは。

この女の子が生きてきた文明は、一体どんな物だったのだろうか。桜実は疑問する。喋る言語からして少なくとも日本国内ではある。

「……待つて。私が着せてあげるから」

とりあえず、桜実が着せなければ、この子はずつとコートだけ着て生きて行くことになる。それはヤバイだろう。色々とヤバイ。

服の着方を後々教える事を決意しつつ、女の子が持つていてる服を取り上げる。

「あ」

「バンザイして待つてて」

服を取り上げられて、女の子が服の行方を目で追う。

止められていたボタンを一通り開けるが、女の子は一向に手を下ろしたままだ。これでは袖を通せない。

「ほら、バンザイ」

「……バンザイって何？」

……桜実は理解した。

この女の子は赤ちゃんだと思つて接した方が、幾分か楽である事に。

・・・

「結局君は……あー、誰なの？」

「サボテン」

「いやそうじゃなくて……」

下着も服も着せたところで、椅子に座らせる。

桜実はその後ろから、櫛で女の子の髪を梳かしている。
癖つ毛なのか、中々綺麗に整わない髪を見つめながら、話しかけて
みる。

すると彼女はおもむろに顔の向きを変えて、窓際を見つめる。

「ん」

「あれ？ ……ああ、サボテンだね」

桜実が飼っているサボテンだ。間違つても人になる訳がないし、現
にサボテン 자체が残つてる。

なのにこの女の子はサボテンと自称するが……まさかアレと一心
同体とでも言うつもりなのだろうか。

そうなるといよいよ困る。どうかそんな言葉が出ませんようにと、
桜実はサボテンに願つた。ついでに神にも。

「あれが、自分」

サボテンと神に裏切られた。

ヒクつく口を自覚しながら、なんとか会話を続けようとする。

「ど、どうしてそう思うの？」

「自分は、自分だから。……哲学？」

「いやそのつもりじゃ無いんだけど」

いよいよ本当にサボテンだという説に現実味が……いや、あつてたまるか。桜実は首を横に降る。

色々とおかしい。まず基本的な事を教えるように、信じられない理由を述べる。

「そもそも歩いてるじやん、植物は歩かないよ？　喋りもしないし、手足も生えてない」

「……はえっ。手が、ある?!」

「え」

今まで声の調子が平坦だつた女の子が、初めて声を荒げて程動搖している。

驚く点が違うと思う。

まさか、この子は今まで本気だつたのか。しかも今まで気づかなかつたとか視野が狭すぎないか。

「サボテンが、人に……あり得ない」

「いやそれこっちのセリフ。サボテンは一本足で立たないし、歩きもしない。しかも喋つたりなんかしないよ。……大丈夫？」

「そんな…………こんな事。なんで……？」

しかしこの女の子にとつては、天地がひっくり返る様な思いらしい。

わなわなと震わせている両手を、何か深刻そうな眼差しで見つめていた。

「まさか、これが生命の進化、というもの…………？」

「んな訳ないでしょ」

植物が人間に変身する様な進化があるだろうか。ファンタジーの世界のみだ。

「神秘だ……」

(口数少ないなと思つてたけど、饒舌になる時はなるし、キャブラリー増えるな……)

「とにかく白状しなさい。イタズラしようとしても無駄。私はわかつてるんだからね？」

たたみかけの段階だ。こんな小さな子に問い合わせるのは気が引け
るが、きっとそこまでしないと、本当のことを教えてくれない。

女の子が座っている回転椅子を回して、サボテンを自分の方へ向き
直させた。

「……でも、本当。前までの自分は、本当にサボテンだった。確かに丸
い身体で、緑色で、毛を纏っていた」

(頑なに認めないつもりか!)

しかし、この女の子の表情は至つて真面目である。今までの無感情
な顔と比べても分かるような真剣さが、溢れるほどに伝わってくる。
「……だったら、証明する」

「まさか……本気?」

「うん。桜実は、2年ごとに鉢を変えてくれてる。いつも冬の日に」
この女の子は、本気で証明するつもりだつた。

サボテン自身でなければ知らないようなことを並べて、相手に納得
させようとしている。

「……いや、成長すると根っこが大きくなるから。定期的に交換する
のは誰でもやると思うよ」

「む、それじゃ……2回目の交換の時、鉢を落として割った!」

「えっ。わ、割ったつけなー?」

「本当に割った! サボテンだから、知ってる!」

無表情で、しかし声を高々と上げ、感情的になりつつ証明を続けた。

「前の夏休み、家の前でアイスつて言う食べ物、落とした! あの上で
見た!」

「ちよ」

「お使いから帰つてきて、玄関の前で卵を落として、割った!」

「ま」

「どうか、落としそぎ! さつき自分を部屋の中に入る時も、酔つた
!」

「え、待つて。サボテンつて酔うの?!」

「酔つた!」

(サボテンつて酔うんだ……。つて、そうじやなくて! この子がサ

ボテンなワケが……）

女の子による証明に対し抵抗するように、桜実は女の子の瞳を真っ直ぐと、正面から見た。

「……」

どうしてか、嘘を言っているとは思えなくなってしまった。

今でもあり得ない話だと思うし、なにがどういう原理でサボテンが人間になると言うのだ。

「あとは……梅雨の大霖の日、家の中に入ってくれた！……その時は何時も玄関前に置くけど、今回は桜実の部屋の中。暖かいから、嬉しい」

「いや、それぐらいしないと、枯れるじゃん」

「うん。嬉しい！」

「う……」

反論が反論ではなくなり、女の子は嬉しそうに見つめる。

表情は1ミリも動いていないのに、何故だか桜実の瞳にはそう映つた。

「……自分は、サボテン。納得した？」

「いや……えっと」

（ここまで引き下がられたら、もう認めるしかないのかな）

桜実は沈黙した。答えを待っている事象サボテンも、無言を続ける。

「わ……かつた。わかつた、認めるよ、君はサボテンだ」

数分の葛藤の末、自らが下した決断を言い放つ。

（これは何かのイタズラ。それも、中学生ぐらいの子がやるような、可愛いイタズラじゃない）

「うんつ。自分はサボテン！」

「……私は桜実。サボテンを飼つて、ただの高校生」
（多分、このイタズラは、運命とか言うヤツの仕業だ）

家族の一員

サボテンは名無しだ。

(この子がサボテンだつて、認めてしまつた……)

それが意味する所は、この非科学的な現象を認めると言う事であつて、それを認める自らも非常識的な判断をするという事だ。

しかし彼女が悩んでいるのは、そこまで難しいものではない。

(サボテンを飼つているとは……つまり、女の子を飼つていると同義なんじゃ……?!)

サボテンの女の子の言葉が本当だとして、つまりはそういう事である。不用意に公衆の目前でその言葉を言い放てば、カメラとマイクを担いだ人と、手錠を持った警察が迫つてくること間違ひなしだ。

だとしても、桜実は女の子をここに住まわせなければいけなくななる。いくら元植物だからって、今までのよう窓際に置いておけば良い、という訳じやないのだ。

「え、えつと……サボテン、ちゃん？」

「?」

(そうだった、そもそも名前を決めてない……!)

数年以上も飼つているサボテンだが、その間名付けられる様な事は全くなかつた。

元々の姿のサボテンに愛着が湧いていないと言えば嘘になるが、名付けるという発想が今のこの瞬間までなかつた。

「……なんて呼べば良いんだろう」

「サボテン、じゃダメ?」

ダメに決まつてゐる。と桜実は首を振つた。桜を由来とした彼女の名前は兎も角、この宇宙のどこに、サボテンを由来とした名付けを、ましてやその名称をそのまま授けようとする親がいるのだろうか。(兎に角、名前を考えないと)

何が良いんだろうと、女の子を見つめて桜実が思考の海に浸かる。花子なんて名前も以ての外だ。植物繫がりかもしれないが、無い。

「……それじゃあ、なんて名前が良い？」

「自分の、名前？」

「うん」

「サボテン」

「いやそういうじゃなくて」

植物である彼女には名付けという概念がないのかもしれない。

桜実はそう察して、答えを彼女に求めるのは止めておこうと考えを改める。

（でも、自分で考えるにしても……これは一回限り。ぽんぽん名前を変えるわけには行かないし）

「……わかった、後回しにしよう。それまではサボテンって呼ぶよ」

「うん」

問題を先送りにした。サボテンのことをよく知つてから名付けをした方が、良いかもしない。

桜実は女の子が頷くのを見てから、なんとなく窓の方に目を向ける。サボテンは相変わらずの様子で佇んでいる。

（サボテンを自称してるけど……本体がそのまま変身したわけじゃないさそう）

この子の存在そのものが全くの不自然だから、どうにか原理を理解しようとするのは無理だ。

頭のキレたの研究者ならばわずかな可能性があるかもしれないが、ただの高校生である桜実の場合それに当て嵌まらない。

「……ちなみに、サボテンちゃんがどうしてその姿になつたかも分からぬの？」

「わからない」

「そつか。まあ気づいて早々動搖してたもんね。生姜焼きを散々食べて、言葉も話して、それでも植物のつもりだつたんだもん。こつちも驚いたし」

「……」

サボテンが僅かに目線を落とす。

それに気付かないまま、桜実はサボテンをこの家に過ごさせる上で

発生する問題について考え始めた。

桜実の両親は、多忙である。どれぐらい多忙かと言えば、海外に赴いた2人が、休日の深夜3時に夕陽バックのツーショットとしてを送つてくるぐらいである。

菊葉という名前の弟が居る。その子もまた別居しており、流石に小学生ということで親戚に預けられている。

そのような事情があつて、二階建のこの一軒家は彼女だけで住んでいる。

友人を迎える機会が多いが、多くて週に2回ぐらいだ。

(隠し通すのは楽、かな)

といつても、そんなのは一時凌ぎかもしれないが……彼女も、それは承知の内だ。

家族に、この事実を明かす時が来るだろう。桜実は決意した。

「あ、そうだ。一応家の中を紹介しておこつか」

「家の、中……。玄関と桜実の部屋しか行つたことがない……」

「あとリビング兼ダイニングの部屋にも行つたよね」

「……」飯の部屋?

「そう、ご飯の部屋」

(そういう覚え方するんだ……)

世間離れ、と言うよりも物を知らなすぎるサボテンだが、そこに可愛らしさを覚えてしまう。

女の子としての容貌は、幼い可愛らしさがありながらも、落ち着いた態度がクールな雰囲気を演出している。

そして口が開けば、世間知らずで物知らずな言葉が出てくるというギャップがある。

(つまり、可愛い)

元々桜実が飼っていたサボテン。その様な感情を抱くのも、きっと無理はないだろう。

・

まず最初に、桜実の部屋を出て廊下を見渡す。そこには3つの扉がある。その内1つは、先程出て行つた白室である。

「2階は、私の部屋と、物置と、物置がある。……まあ、部屋が余つてるんだよね」

「……物置が、2つ？」

「うん。時間が出来たら片方の物置を空けるから、それまで私の部屋で寝てもらうね」

「ん……」

そして2階から降りて、トイレや風呂部屋を見せる。
ここにも使われていない部屋があり、そこも物置として使われている。

「物置？」

「うん、物置」

桜実の中での行動範囲は、特別広いわけではない。その上この家には基本彼女1人しかいないから、どうしても大量の部屋を持って余してしまうのだ。

サボテンの女の子がそこに加わったとしても、2階の部屋が1つ埋まるだけだろう。

「……そういえば、君つてトイレするの？」

「…………？」

「まあ元植物だしわからないか。それじゃあ……」

「ん、トイレ、知ってる。桜実はトイレっていう部屋で排泄をする。
……だから、自分も同じ？」

「排泄……。ま、まあそうだよ。ていうか大半の人類はトイレ行くから

（絶妙に語彙力が一人歩きするなこの子……）

「この辺りがむずむずしたら、トイレに行つてよね」

「ん……」

「とりあえず、この家はこんな所。……なんか質問とかあるかな」

「……」

首を傾げる仕草で反応が返ってきた。質問が出てきそうで出でこないような感じに見える。

何があるかな。と思つてしばらく待つても、問いは出てこなかつた。まあ後でで良いだろうと判断する。

「今だけ質問を受け入れないつて訳じやないから、急がなくてもいいよ」

「……ん」

一通りの家の中の案内が終わり、とりあえず自室に戻る事にした。この後は、サボテンの為の部屋を用意でもしておこうか……。と考えていると、不意に女の子が何かを持って正面に出てくる。

「……この、花」

「うん？ ……って、リビングのお花？ いつの間に持つてきて……」

「この花、生きてない」

「生きてないって……そりやあ」

花弁は萎れてなどいないし、茎は真っ直ぐ立つていて。枯れてはないが、女の子が言う様に、生きててもいい。というのも、この花は……。

「造花だからね、それ」

「……ぞうか」

「そう、造花。布とかで作った花で、生きてない。よく見たら織つてあるのが見えるでしょ？」

「……おつてある？」

「まあ、わからないか。取り敢えずそれは偽物で、成長することも枯れることも……あ」

（そうだつた、この女の子は元々サボテンで、植物だ。多分、生命の冒涜とか、軽視しているとか言われるんじや……）

そこに気づいてしまつて、この落ち着いた女の子が怒りを露わにするところを想像して、身構える。

しかし一向にサボテンの様子は変わらず、相変わらず造花の姿をじつと見つめているだけである。

「……生きてもいなのに、綺麗」

「へ？」

「ごめんなさい。勝手に持つて行つた。……元の場所に、戻す」

「あ、うん、よろしく……」

想定とは違う反応だつた。

それもなんだか、深い言葉を残して行つてしまつた。

特に何も考えていないとは思うのだが、ああいう言葉が出てくると驚いてしまう。

「……不思議ちゃん」

数時間足らずの付き合いで抱いた印象に、『不思議』が加わつた。他にも『口数が少ない』『たまに口数が増える』『その時の語彙力は絶妙』がある。

（しかも元植物で、私に対して気を許している様だし……。そ、そう考えるとなんか可愛く思えてきたかも。いや今まで可愛いけど）そして、その時。

桜実の脳に電流走る。

「……不思議？」

（不思議といえば、アリス……アリスか。うん、良いかもしけない）すると、狙つたかの様なタイミングで女の子が戻ってきた。

ふんす、と顔を自慢げな表情へと変えた桜実を見たサボテンは、小さく首を傾げる。

「ねえ、アリスって名前はどう？ 君の名前だよ」

「蟻^{アリ}、巣^ス？ ……自分は蟻じゃない」

「いやそうじゃなくて……」

（……うん、これは不採用だわ）

サボテンは人間だ。

渾身の名付けに、サボテンの反応を見た桜実が膝をつきかけた後。何時までもくじけていられないと、桜実は再び立ち上がる。

「ちょっと布団の準備してくる」

「ふとん……」

桜実が使っているベッドはシングルベッド、つまり1人用であり、2人が一緒に寝るには身を寄せ合うしかない。

女の子同士、それも一応は長い付き合いの2人だが……、それでも、接触が免れない程の距離で共に寝る程には緊張が取れていらない。もしサボテンが良くても、すなくとも桜実はそう思っている。

「お客様用の布団だけど……よいしょっ」

隣の部屋から持ち出された布団が、桜実の手から離れて床にぼすんと落ちる。

特別高級な布団というわけでも無いが、適切な手入れはなるべくこなしているからか、それなりに寝心地はいい筈だ。

サボテンが寝心地という物を理解するかは兎も角。

「とりあえず今日からここで寝る事。いいね？」

「ん。欠かすべきではない三大欲求。ちゃんと知つてる」

「お、おー……」

元サボテンの割には、語彙力も知識もちゃんと備わっている。少々天然っぽい所はあるかもしけない。

とりあえず床に布団を敷いて、寝る準備を整えておく。まだ就寝の時刻ではないが。

「よつし、それじやあ……お風呂にしよう。お風呂は分かるかな？」

「……お風呂。お湯に浸かる」

「うんうん。植物とは縁がないかもしけないけど、人の姿になつたらには、ちゃんと体を洗わないと

植物とは違い、動物は汗や老廃物、その他諸々を出さなければ生きていけない。先ほどの排泄と言うのもそうだ。

それらを体から洗い流す行為は、人間に限らず、様々な動物が行なっている事である。

「……」

「……もしかして、緊張してる？」

やはり、やつたことのない事を初めてやると言うのは、このサボテンでさえ緊張を覚える事の様だ。

サボテンは、自身がお湯に浸かっている姿を想像しているのかしていないのか、首を傾げている。

(……これは、この子一人でお風呂に入れるべきじゃないね)

下手したら、お風呂で溺れてしまうかもしれない。植物としての経験が豊富な彼女の場合、その可能性も十分あるだろう。

そう考えた桜実は、サボテンの手を取つた。

「じゃあ、一緒に入ろうか」

「一緒？」

「うん、一緒に」

・ · ·

「服の脱ぎ方、着方、ちゃんと覚えたかな？」

「……覚えた」

「それは良い」

風呂に入る前に服を脱ぎ、そのついでにサボテンに桜実が服の着方、脱ぎ方を教える。

そうすればサボテンの肌が見えることは勿論、手が触れることが普通にあつた。

「それにしても、瘦せてるね。なんというか、ふっくらとした感じが少ないと言えども」

見て、触れて、そう感じた桜実は、サボテンの体型をそう表現した。見た目は中学生ほどだから、成長の余地はありそしだが……この元

植物のサボテンだ。もしかしたら成長の仕方が違うという事もある。

「？」

「んん、君には分からぬよね。気にしなくていいよ」

(私が十分な食事を取らせて、運動させて、あとは友達でも作らせて)
そうすれば、とりあえず健康的に生活できるだろう。友達を作る
方法に関しては悩みどころだが。

桜実も手早く服を脱ぎ、サボテンの手を引いて脱衣所から風呂場に入る。

風呂の大きさは、まあ3人は入れないだろうが、女子供が2人入つても大丈夫な程度だ。

「……蒸し暑い」

「お風呂はそういうもんだから。最初はシャワーからにしようか」
風呂場に踏み入れて最初に行うのは、まずこれだろう。

「……サボテンに過度の水は」

「いや、人間でしょ。今は」

「んぐう」

サボテンを座らせて、髪を洗う準備をする。

「ほら、目を瞑つて。……うん、じゃあそのままじつと」

「見えない……」

「そりやあ、目を閉じたら何も見えないよ。悪いけど、我慢してね」

サボテンの目が閉じられた事を確認して、シャンプーを付けてサボテンの髪を揉み始める。

(……人としては、生まれたてだからなのかな。随分と髪が柔らかい
気がする)

泡立つて、シャンプーの香りが髪に纏わりつく。

洗っている片手間に手櫛で弄つてみる。よく手入れすれば、この様な髪を維持できるかもしれないが……。

「流すよ」

「んん……」

我慢するような呻き声を了解の意と解釈して、シャワーで流す。

そのついでに、また手櫛で、そして持ち上げたりしてみる。

「やつぱり、綺麗な髪だね」

「きれい……、髪が？」

「うん」

（肌も綺麗だし……なんというか、新品って感じ？　いやこの表現だと語弊しかないけど）

やはり生まれたてだからか、傷はどこにも見当たらない。平和な日本でも、転んだり怪我をしたりする事は少くないのに、だ。

「……よし、洗い終わった」

「ん」

すると、桜実に背中を向けていたサボテンが振り返る。

「えっと、どうしたの？」

そしてサボテンがおもむろに立ち上がり……顔を近づける。

目と目が見つめ合う……事は無く、サボテンの目線は桜実の髪に向けられている。

「……桜実の髪も、綺麗。だと思う」

「そ、そつか」

（け、結構近い……）

もしこれが異性で同年代だったら、そもそも一緒に風呂場にいるという状況事だろう。

そのような条件だつたら、そもそも一緒に風呂場にいるという状況にはならないが。

「リンスも付けるから、元の場所に戻つてくれるかな」

「……わかつた」

・・・

シャンプー、リンスを終えて、身体も綺麗に洗い流したところで、後は風呂に入つてスッキリ出来る頃となつた。

「髪纏めるから、こっちおいで」

「まとめる……？」

「ちよつとだけ我慢してね」

サボテンに後ろを向かせると、手早く髪を束ねて、纏めて、留めた。次に自らの髪も同じように留めて、桜実が先に入る。湯船に立った桜実は、手でサボテンを招く。

「気持ちいいよ」

「んん……」

無表情を貫いているが、躊躇や葛藤を感じられる声を漏らす。

植物を水中に漬けるのは、適応していない植物にとつては確かに危険な事である。

(やつぱり、怖いのかな)

しかしこのサボテンは今や人間で、女の子である。危険の心配は無いし……、

「大丈夫だよ」

その側には桜実が居る。

「……？」

「何かあつたら助けてあげるから」

だから、心配の必要はない。その意味を込めて、伝えた。

強風から、大雨から、雪から匿った時と同じように、桜実は助けてくれた。

「助ける……」

サボテンの頃は、そうだつた。

それじゃあ、今はどうだろうか。

姿は人に変わり、実体を持つて、その2本の足で歩いている。

目線の高さは、前とは比べ物にならないぐらい近くなった。

それでも、桜実は助けてくれるのだろうか。

彼女は、湯船に足をつけるのを手伝おうと、両手を差し出している。

この手を取れば、楽に桜実の元へ行くことができるだろう。

「……桜実」

サボテンは、心配の必要はなさそうだ、と、一步步み寄つて、彼女

の名前を呼んだ。

「うん？」

サボテンは、その両手を掴んで……。
自らの頬に、添えさせた。

「……えつと」

「桜実、いつもこうやって、抱えて運んでくれる」

「か、抱えて……。いや、うん。何時もこんな感じで運んでたね」

「だから、連れて行つて」

「つ……」

（そんな事、言われたつて……）

（女の子の頭を持ち上げて、連れて行くなんてできるわけないでしょ
?!）

首から下の体重全てが首にかかつた時、どうなるかは想像もしたく
ない。

桜実は目線を下げて、微妙な表情を隠す。

どうやら、サボテンの鉢を持ち上げて運んでいた頃の経験を基準に
しているのだろう。

残念ながら、今回はその経験を人の姿になつてから活かす事は叶わ
ない。しかしサボテンはそれを理解していない。

（さ、桜実。君は実質、サボテンの保護者なんだ。この子の“人”生経
験はたつたの数時間分しかない。ちゃんと事実を伝えて、手を引いて
上げないと……。持ち上げるんじやなくて）
「えつとね、サボテン？」

サボテンは、両頬に手を添えられたまま首をかしげる。

「植物だつた頃に比べてすごく重いから、今までみたいに持ち上げ
て運ぶとかは出来ないかな……」

「……」

「……ね？」

「……」

サボテンは沈黙した。

そして理解した。この姿では、今までの様に運んでもらうことは出来ないのだ。出来なくなつたのだ。

「諸行、無常」

(いきなり何を言いだすんだこの子は)

目のハイライトが何処かへ消えた。サクラミの手を掴む力も無くなつた。

「こんな事なら、いつそ元の姿に……」

「ちよちよちよ、はーいストップ。語彙力暴走させた上に軽く絶望してるんじやありません。つてかその言葉どこで覚えたの」

ただでさえ多い謎が、また増えた。

それはともかく、サボテンの見当違ひな絶望は、本当に見当違いで無用な物である。

確かに人間の姿になつた今、かつての様に運んでもらうことはできない。

だが、本当は運んでもらう必要はない。

「運んではあがられないけど、君には足があるんだよ。……ほら、跨いで」

「跨ぐ……？」

足という存在を、今の今まで忘れていたのだろうか。サボテンが足元を見て、2本の足の存在を確かめてから、頷いた。

サボテンが恐る恐ると片足を上げ、もう片方の足だけで体を支えつつ、体の重心を移す。

本来、二足歩行というのは非常に不安定な移動方法である。

慎重に、湯船の底に足を付ける。両手は桜実によつて支えられたまま。

今度は、もう片方の足を浮かせて……――

「あ」

サボテンが、バランスを崩す。水の抵抗に、思うように足を動かせなかつたのだ。

本能的に目を閉ざす。

サボテンは、これから来るであろう衝撃と痛みを、一瞬で想像した。

「——よつと

けどそれは、一向にやつてこない。

代わりに、暖かい何かが、体を包む様な感覚を得る。

「大丈夫だよ、目を開いて」

「……あれ？」

目を開けば、自分は湯船の中で立つことに成功していたことに気付く。

しかし体が動かない。サボテンが身体を見下ろすと、胴体が桜実の手でしつかり抱えられているのが見えた。

「持ち運んであげられなくとも、支えられるから」

「……」

「ほら、座つて。暖かいよ」

サボテンの姿勢が安定して、桜実の手がサボテンから離れる。

「あ……」

「……どうしたの？ やっぱりこわい？」

「……ううん」

桜実の言う通り、確かに暖かい。

サボテンがしやがみこんで、胸の辺りまで浸かる。すると暖かさが全身に伝つてくる。

「……」

「どう、お風呂。気に入つた？」

サボテンは、ゆっくりと頷いた。

まだ慣れないのか、やはりおつかなびつくりな様子だが……。それに、何やら落ち着いていない。

「……桜実」

「うん？」

「……さつきの、やって」

「『さつきの』？」

一体なんのことと言っているのだろうか。

サボテンの言葉に、桜実は意味を理解しかねる。

すると、サボテンがおもむろに桜実に対して背中を預け出した。桜実の両足に挟まれつつ、背中を桜実に押し付ける。彼女を背もたれにするようになってしまった。

(……背もたれ？ そういうえば、さつきもたれかかっていた時……)

サボテンが、背中を預けたままこつちを見ている。

“さつきの”の意味を少しだけ予想出来た桜実は、サボテンの背中から手を回して抱きついてみる。

「ん……」

もぞもぞと、少し動いて……。それだけして、動きが止まつた。

サボテンは桜実に後ろから抱きつかれたまま、湯船に浸かっている。

「安心、する」

「……そつか」

サボテンが何を思つて、これを要求したのか。

その殆どを理解した桜実だが、しかし何も言わずに、その一言だけで返した。

サボテンはサホだ。

晩飯を食べて、服を着替えさせて、説明と案内がてら家中を歩き回つて、そして風呂に入れて……、

「……すう」

で、サボテンは寝込んでしまった。

布団に横たわらせて、掛け布団を被せたら数秒だった。……変身の反動か何かで疲れでも溜まっていたのだろうか。

よく考えたら、彼女という質量が無から発生した時点で世界の法則が乱れている気がする。

(……どこまで行つても不思議な子だなあ)

そういえば、この子の名前がまだ決まっていない。

何が良いのだろうか、と名付け対象の寝顔を見下ろしながら思考を始める。

(「サホクラ」とか。……なんか違う。しかも私の名前と似てるし……)

それじゃあ何が良いだろうか？　かえつて極まつた名前だとキラキラしていてあまりよろしく無い。彼女は悩み始めた。

サボテンを買ったのは桜実が誕生日を迎えた頃、ならば自身の名前から一部を取つても良いかもしねれない。

(例えは…………あー、頭がぼんやりして思い浮かばない)

どうやら眠気を催しているのはサボテンのみではなく、桜実もそうであるようだつた。

上手く名前を思い浮かべられないまま、諦める。

(明日考えよう、明日。すごく眠いし……。うへえ、まだ少し早いのになあ)

スッキリしない頭のまま、そう言えば今日は金曜日だつたなど思い出して、それならばまあ起きするのも良いなと思って、のそのそど自分のベッドに潜り込んだ。

(寝ている子の横でいそいそ動き回つてゐるよりはいつか……)

そう思つて自分を納得させて、枕の横に置いてあるリモコンを操作

する。

即座に消灯はされず、部屋がだんだんと暗くなつていく。

「おやすみなさい」

完全に光が消えた頃に、桜実は囁くような声で眠りの合言葉を告げた。

「……あー」

目が覚めた。

窓から差す光が、丁度桜実の目元を照らしている。

思わず瞼が力むが、それがかえつて意識の覚醒を促す。

「……」

薄目を開けて、天井を見つめつづぼんやりと頭を働かせる。

昨日は何があつた？ サボテンが擬人化した。そういうえば布団で寝させていた。

朝が来たからには、起床の時間。

サボテンが寝ていたら起こそうかと、その為にまず体を起こそうとするが……。

「……あれ」

体が重い。

力が入らないというよりかは、不自然に身体に荷重が乗っている感覚だった。

(……え？)

寝てる間に枕でも抱えてたか、でもそこまで重くないはず。

桜実はそう思いつつ目線を自身の胴体に向けてみる。すると、毛布に不自然な膨らみが見つかった。

そういえば、身体が妙に温い。

この感じは人の体温だ、と気づいて、まさかと思つて毛布を捲りあ

げる。

「……何やつてゐるの、サボテン」
「ん……」

サボテンは、まるで子供の様に桜実に抱きついていた。
桜実が就寝した時点で、サボテンは別の寝床にて眠つていた筈だったが……。

呼び掛けても、まだまだサボテンの眠りは深い。

これでは寝耳に水ではなく、寝耳にそよ風である。

どうしたものか、と桜実は迷う。

（本当に、子供みたい。いや、高校生の私が言えたことじゃないのか
も。……新しい妹が出来たつていうのが近いか）

桜実は少しだけ溜息をつくと、サボテンを胸元に抱き寄せる。人間姿での付き合いは1日もないが、抱き枕扱いすることに抵抗はなかつた。

さて、朝早くから準備しなくてはならない平日ならともかく、サボテンの目覚めを待つぐらいの時間はある。

無理に起こさず、その対価としてサボテンにはこのまま抱き枕になつてもらうことになった

（妹、か。……菊葉は元氣にしてるかなあ）

目を閉じてじつとすれば、2度寝ぐらいはすんなり出来そうなぐら
い、ほんやりとした意識のまま、サボテンを撫でる。

菊葉というのは、今現在は親戚に預けられ、小学校に通つているあ
の弟の名だ。あと一年すれば中学校へ進学することになるだろう年
だが。

（……私も、ちょっと人肌が恋しいのかもしれない。なんだかんだ、一
人暮らしも結構長いし）

一年間の一人暮らし。

週に数回友人を招き入れ、長期休暇の機会に実家へ帰つているとは
言え、一人で過ごす割合が多いことは事実。

(……そろそろ作るかな、朝ごはん。昨日の晩飯は残つてないし)

胸元の温もりからそつと離れ、ベッドから立ち上がる。

サボテンが少し身をよじる。

(サボテンの事だし、起きたら何するか分からないな……伝言メモでも握らせておけばいいか?)

しかしサボテンが文字を読めるかは定かではない。

少し迷った桜実は、まあ無いよりはマシだろうと、起きたらキッチンに向かえという節を付箋に書き、サボテンに握らせる。

読めなかつたら読めなかつたで、朝食が出来上がつた頃に桜実から迎えに上がれば良いだろう。

・ · ·

ごろん、とサボテンが寝返りを打つ。

その時に、窓から差す陽光が照らされる場所に両目がやつてきて、彼女の意識に刺激を与える。

「ん……」

無意識が天井を視界にとらえる。意識は未だに微睡の中にある。半目のサボテンの視線は、掴みどころが無いままに揺らいでいた。そんな状態のまま、何かを求める様に、腕で空を抱えるような動きを一度する。しかし布団が腕に引っかかるだけで、何かを抱える事は叶わなかつた。

(……さくらみ?)

そこで、ようやく意識が纏まつてくる。

瞬きを一度。そして二度目を行なつて、このベッドに寝転がつているのは自分だけだと気付く。そもそもサボテンは床で寝ていたと記憶している。何故ベッドの上にいるのかは分からなかつた。

「ん、く……」

身体が固まつてゐるような気がして、身体をほぐす様に大きく伸び

をする。そうすると身体は軽くなり、眠気も何処かへ去つていった。
床に足をつけて、立ち上がりつて見渡しても、この部屋にはサボテン
以外誰もない。

「……？」

ふと、目線が一点に定まる。

それは、桜実がサボテンに握らせた紙片……ではなく、窓の側に置
かれた、植物の方のサボテンである。

「……私だ」

彼女にとつては、自分自身の姿である。

寝起きだからか、随分とゆつたりとした動きで、我が身の分身とも
言えるその元に近づく。

ぺた、ぺた、ぺた、くしゃ。

裸足でカーペットの上を歩いていくが、布や毛では無い感触が足の
裏に張り付く。

なにか踏んだ事に気付いて、サボテンは足元を見る。

『サボテンへ。起きたら下の階に来てね』

「……？」

サボテンは手紙を拾い上げて、首を傾げる。

彼女とて桜実が幼い頃からの付き合いであり、ある程度文字の知識
は持ち合わせている。

ひらがな。まあ読める。

カタカナ。一部怪しい。

漢字。桜実という字なら読める。あと石焼き芋。

……見た目相応の年齢として見ると、余りに不十分である。
「読めない……」

彼女の言語能力に配慮されていないメモは、やはり物事を伝えるこ
とは叶わずにサボテンの手から離れた。

幸い、ある程度桜実の生活サイクルを記憶していたサボテンは、桜
実は今頃朝食をとっている頃だろうかと予想を立てることができた。

丁度、サボテンのお腹が鳴る。

「……ぐー？」

奇妙な生理現象に首を傾げ、そういうえばこの現象は人間たちが食事を必要とするときに起きるという事を思い出す。言わば、サボテンは今空腹という状態にあるのだ。

空腹ならば、食事を。

食事を見るなら、あそこだ。

「おはよう、サボテン」

「おはよう? ……あ、おはよう」

予想どおり、キッチンには桜実が居た。

どうやらなにかを作っている途中の様だ。フライパンは卵とベーコンを乗せてジューと音を立てている。

「ん、よく挨拶できたね」

サボテンにとつては聞き慣れた言葉ではあるが、いかんせん、言い慣れてはいないのだ。それでも返事ができたのは、昨日の時点で自身が人間であるという自覚が出来たおかげだろう。

人間であるということはつまり、目の前の飼い主と大まかには対等の存在であるということだ。

桜実がフライパンをコンロから持ちあげて、皿の上に盛り付けられる。

トースト、目玉焼き、ベーコン、あとサラダ。簡単な料理だが、その分味付けは欠かしていない。

トーストにはバターを。目玉焼きやベーコンには塩胡椒。サラダにはドレッシングを。

細やかなものかもしれないが、コレだけで朝食は美味しくいただける。少なくとも桜実はそう思っている。

「これ……ちようしょく?」

「うん。……ああ、もしかして嫌だつた?」

「……」

サボテンは返答に困ったのか、口を開いてから、一切言葉を出さず閉ざした。

それから首を傾げて、しばらくして。

「嫌、じゃない、けど」

わからない。サボテンは、この食事に対してどう思ったのかがわからない。

気持ちを口から、言語化して表すのは難しい。大人でもそれが稀に、あるいはよくあるというのなら、仕方のない事だろう。けども、「嫌」という単語を否定するぐらいは出来る

「そつか。まあ、気に入らなかつたら言つてね」

「ん、食べる」

「召し上がり」

多分。いや、確実に人間としての経験年数……いや、経験日数と言うものが片手の指で、なんなら猫の指でも数えられるぐらいの数しかないサボテンには、フォークの扱いも難しいものだった。

昨日と同じ様に食べさせてやろうか、と思つた桜実は、その考えを一度自ら否定する。

教えて、試させて、ダメならそうするべきだ。そうしなければ、ダメにならない。

「親指を立ててみて、先端が親指の長さぐらいに来る位置で持つたら、使いやすいと思うよ」

無理して鉛筆持ちの様な持ち方を教えても、難しい。

グーで深く握っているサボテンに、助言をする。グーで持つのは悪くないが、それ以上に変な持ち方は修正させる。フォークの先端と手の間隔が短いと手が汚れる。

そういえば半熟だつたと頭の片隅で思い出しつつ、黄身から溢れる液体と崩れる形状に動作を停止するサボテンを、桜実は和やかに見つめた。

サボテン。そうか、サボテンか。ふと、彼女は呟く。

「……サホ、ねえ」

黄身から剥がれてしまつた白身をようやく口に運んでから、サボテンは桜実からの視線に気付く。

すると桜実が、目の前の食事に構わず携帯を弄り始め、今度は何か

に領く。

画面に写るのは、たつた2文字の漢字である。

「咲歩……」

「……？」

「……ねえ。君の名前なんだけど、サホってのはどうかな」

キラキラみは無さそうで、サボテンという名の頭2文字を取つたが故に安直だと感じられる名前で。

その名に込められた願いというものは無いに等しいけれど、それでも桜実としてはこの子に相応しい名前ではないかと、我ながら確信して。

「サホ……？」

「咲歩。漢字の方は後付けだけど、人名としては……うん、大丈夫だと思う」

「名前……」

「そう。君の名前」

「……良いと、思う」

人間の感性を持ち合わせてているわけでもなく、なんならアリスという言葉を蟻の巣と勘違いするぐらいだが、サボテンとしては不思議とこの2文字が魅力的に感じた。

「良かつた。気に入ってくれて」

「……うん」

両親もこうして命名に悩んだのだろうか。本人の意見を聞けない分、桜実より厳しい条件だ。

桜実という名前は、自身が生まれた日、桜が実をつけていたのを見て決めたと言っていた。

……当日に決まつたというあたり、決定が遅い事を否定するのは天邪鬼でもなければ出来ない。

「……ねえ、サホ」

「んも?」

「あとで、服を買いに行こつか」

桜実が唐突にそれを言い出したのは、黄身の中身が思いつきり服に溢れているのを目撃したからである。